

## 31号 特集1 厚生労働省「精神障害者の地域生活支援の在り方を考える検討会」に関わって

当事者の政策決定過程への参画

見て、聴いて、憤った、1年間を振りかえる

小泉内閣の三位一体改革の渦の中で、精神保健福祉の現場も相変わらず混沌とした状態が続いている。「響き合う街で」編集部では、2003年10月から始まった厚生労働省「精神障害者の地域生活支援の在り方を考える検討会」に、当事者代表の構成員として香野英勇（やどかりの里）が出席したことを発端に、国の政策決定の現場を見続けてきた。

その過程を

- ① やどかりの里という組織はどう関わってきたか
- ② 実際構成員として参加していた当事者2人の声
- ③ 傍聴席から見守ってきた仲間の声

を柱に振り返り、われわれひとりひとりが今立ち向かうべき課題を模索していきたい。

## 特集2 障害者就労の最前線 ー多様な現場からの発言ー

「働く」ということは、単に生活の糧を得たい、賃金が欲しい、というだけにとどまらない。働くこと自体がその人の生き様と重なって、人々の「生きがい」になっていることが多い。

折からの打ち続く不況のあおりを受けて、職に就くこと自体が厳しい昨今、障害者の働くことへの多様なニーズに対応することは大きな困難が伴っている。本特集で紹介する4つの就労の現場は、それぞれ職種、規模などは違うけれども、「障害者にとって働くことの意義」を改めて問い直す貴重なヒントが詰まっているものである。